

## ■今月のメッセージ（2011年2月）

日本銀行富山事務所長  
水上 誠一

日本サッカーがアジアの頂点に返り咲きました。ザッケローニ監督の気配りと、控え選手・スタッフを含めた総合力で勝ち取った「日本的」な勝利でした。

サッカー通ではないので、オーストラリアが何でアジアなのとずっと不思議に思っていたのですが、オーストラリアは、オセアニア連盟に所属していた時代（2005年末まで）、地区予選では31対0（3分に1点！）で勝利するなどダントツだったのに、プレイオフでアジア・南米などで惜敗した強豪チームと当たってワールドカップ出場権を逃すなど割に合わないと不満でした。そこで、アジアで普通に勝ち上がった方が得、ということで、強力なロビー活動を経て、「経済的な利益を考慮」（AFC会長）して、アジアへの参加が決まったそうです。

日本を含むアジア勢がなめられたという感じもなくはありませんが、アジアのレベル向上にヨーロッパ式サッカーであるオーストラリアの壁（ゴール前では本当に壁でしたね）は明らかに貢献したと言え（FIFAランキングで2006年の47位から2011年1月の29位へ上昇）、今回はオーストラリアの「野望」を10年振りに打ち砕く快挙でした。

本大会のMVPは本田選手でしたが、決勝戦でのman of the matchは守護神川島選手であり、FIFAのホームページにインタビューが掲載されています。オーストラリアには多くのチャンスがあったが勝利の鍵は何かという問いに対し、川島選手は、「我々は（いつも通りの試合をやるために）耐え続けることが必要でした。」と答えています。

これまでの試合では、（本当は違ったかもしれませんが）あまりにもゴールキーパー頼みのように素人には見えたのですが、今回は「我々」で守ったところが感動的でした。こうした点も、一体感の面で監督の目標の一つだったのではないのでしょうか。

監督は「サッカー界の豊臣秀吉」だそうで、プロになることを怪我で断念し、10年間保険代理業などを営んだ後、少年チームのサッカー指導者になり、その実力を見出されて、その後ACミランを含む13チームの監督を歴任するという「出世」を果たしたそうです。

監督による個々の選手への声掛け、勝利インタビューでの控え選手・スタッフへの感謝、局面打開への小回りの利く戦略、適材適所で選手を一人残らず活用する、等々、苦労人である優良中小企業の社長さんが実践している「日本式経営」といっても過言ではありません。

一時期批判の対象となった「日本式経営」ですが、中国でのストライキの多発などを受け、日本からの進出企業が、実は欧米式に中国人労働者を扱っていたことを反省し、「日本式経営」に切り替え、成功する例が出ています。すなわち、一生懸命やっても給料が上がらないのでサボる、が常態だったのが、改善後、社長・工場長からの工員への声掛け、社長が工員と同じものを食べる、意見の吸い上げによる改善（中国人に合った作業手順、地方に合った食事の味付け、など）、個々のスキルを活かした昇格人事などで、ストライキが未然に防げたうえに、生産性が向上したのです。

意外にも、「日本的経営恐るべし」を実感させてくれた勝利でした。